

しあわせの村リニューアル検討有識者会議 提言

令和2年3月23日

有識者会議設置の背景及び目的

- ・ しあわせの村は、ノーマライゼーション（※1）の交流拠点として平成元年に開村してから30年が経過し、施設の老朽化に加え、複雑多様化が進む新たな福祉課題への対応が求められている。また、既存施設の利活用や、村内施設間の協働推進、市内各地域など村外との連携不足等が課題となっている。
- ・ こうした課題を解決するためのリニューアルに向け、これまで「しあわせの村あり方検討プロジェクトチーム」において検討を行ってきた。
- ・ この度、しあわせの村で今後実施すべき新たな取り組みについて、専門的な見地及び市民の立場から意見を求めることを目的として、有識者会議を設置し、検討を行った。

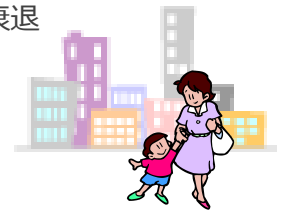
1 しあわせの村を取り巻く現状と課題

社会課題・動向

- ・ 人口減少・少子高齢化の進行、コミュニティの衰退 ⇒ 福祉課題の複合化・複雑化、社会保障費の増大、地域包括ケアシステムの構築、地域住民が支えあう地域共生社会の実現
- ・ バリアフリー、ユニバーサルデザイン（※2）の社会への浸透、2020パラリンピック開催によるパラスポーツ普及等

神戸市の福祉課題

- ・ 人口減少・少子高齢化、独居高齢者の増加、空家の増加によるコミュニティの衰退
⇒ 地域社会を支える仕組み、神戸の魅力向上、くらしの質の向上
- ・ 高齢者や障がい者は働きたい意欲があっても様々な要因で参加出来ない現状
⇒ 誰もが働きやすい仕組みづくり
- ・ 認知症の人と家族への支援の充実
- ・ 子育て支援の充実



しあわせの村の課題

- ・ 開村当時と比べて社会の状況は大きく変化。ノーマライゼーションの交流拠点として整備されたしあわせの村においても、新たな福祉課題への対応や、新しい取り組みを、積極的に進めることが必要
- ・ 村の豊富な資源や活動実績の活用（認知症支援、パラスポーツ、最新技術・テクノロジーの実証等）、施設の老朽化対策、新たな取り組みに向けた既存施設の転活用
- ・ 高齢者や障がい者をはじめ、子どもや子育て世代等、だれもがより楽しみ、より参加できる村へのアップデート
- ・ 「非日常を楽しむ村」だけでなく、多様な「しごと」の創出など「日常を支える村」へのアップデート
- ・ 新たな取り組みへ様々な人を巻き込む、関係人口の増加

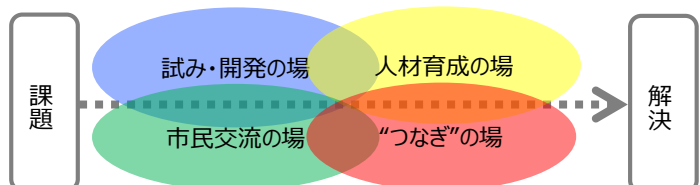


※“しごと”とは、ボランティア活動なども含む自分らしい生き方を実現していくための多様な働き方

2 しあわせの村リニューアルにおける取り組みの方向性

しあわせの村の将来像（H29しあわせの村あり方検討プロジェクトチーム報告より）

- ・ しあわせの村の将来像は、次々に福祉の試みが起こり、新たな福祉課題を解決することによって、ソーシャルインクルージョン（※3）の実現に貢献するとともに、市民のくらしに寄与すること
- ・ しあわせの村を起点に国内外からの人材を呼び込むとともに、広く成果を発信することで、国際都市として発展してきた神戸のさらなる成長や国際的貢献につなげていくべき
- ・ 4つの機能により、時代に応じた様々な福祉的課題を解決し、全市への事業展開や最先端事例の実現に繋げる



取り組みの方向性

・ 課題解決に取り組むための、多様な人・団体との連携

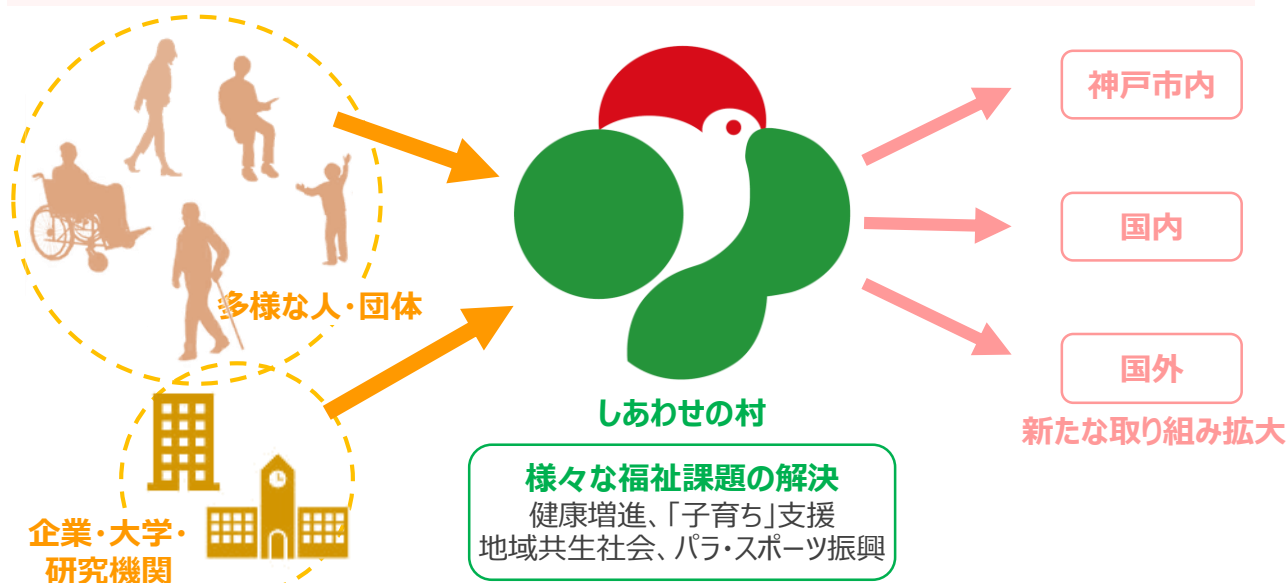
様々な福祉課題の解決に取り組むため、先端的な技術・ノウハウを集積する。そのため、大学等の研究機関や企業、課題解決に取り組む各地域の市民など、多様な人・団体と連携し、課題解決に取り組む。

・ イノベーションを起こし、ソーシャルインクルージョンを実現

村の中でイノベーション（※4）を起こし、課題解決のための様々な試み（モデルづくり）が進むことにより、村内・市内の各地域・市外からの人材が交流し、高齢者・障がい者・子どもなど多様な市民が村の活動に参加することで、ソーシャルインクルージョンを実現。

・ 市内の各地域・全国への発信

様々な試みを発信・展開することにより、しあわせの村から市内の各地域へ、さらには国内・外へ新たな取り組みを広げていく



※「子育て」とは、子ども自身が成長することに視点を置いた言葉。

3 しあわせの村における新たな取り組み

① 高齢者・障がい者が主役の村づくり（“しごと”などの役割づくり）

高齢者・障がい者にとって就労や地域活動などの希望があっても、様々な要因で出来ない現状に対し、就労に加えボランティア活動なども含む多様な参加のあり方を作り出し、認知症の方も含め高齢者・障がい者がサービスの受け手としてではなく、主役となる村をつくる

企業・大学と連携した“しごと”創出の基盤づくり

- ・ しごとの創出に向けて、遠隔での就労（リモートワーク（※5））や企業・大学を対象とした住機能付サテライトオフィス等、村内施設の転活用によるモデル的な環境整備
- ・ 大学との連携等による、村内事業での様々な高齢者・障がい者雇用の促進、学びの機会提供、超短時間雇用（※6）等多様な働き方の創出 等



幅広い役割づくりや機会の創出

- ・ ボランティア活動など高齢者や障がい者のライフスタイル、ニーズに応じた多様な「しごと」を創出
- ・ 村内サービスの利用者という役割から、村内の取り組みに積極的に関わる役割と機会を得る場に
- ・ 高齢者・障がい者に加え、子どもや家族などあらゆる人が関わり、役割を果たすことでソーシャルインクルージョンを実現

今後の課題

- ✓ 賃金という形だけではなくポイント制度など、社会参加の意欲を引き出す仕組みの構築を検討
- ✓ 幅広い人々が村内の取り組みに参加しやすくなるための環境整備として、職住近接の観点からしあわせの村と市内各地域との連携のあり方についても検討することが必要

②様々な領域における課題への対応

(1) パラ・スポーツの振興

ユニバーサル社会への理解を深め、あらゆる人の健康づくりと社会参加を実現することが必要

- 障がいの有無に関わらないパラスポーツ体験機会の提供（パラスポーツ教室の拡充）
- 施設改修によるパラスポーツアスリートの育成拠点としての環境整備（各種大会実施、選手団の合宿、ニュースポーツ（※7）大会誘致）
- 生きがいづくりや交流・社会参加機会としてのeスポーツ（※8）活用



今後の課題

- ✓ 企業を巻き込み、取り組みの幅を広げることが重要であり、将来的にパラスポーツメカやスタートアップ企業との連携によるパラスポーツ用品開発なども
- ✓ ふれあい体験学習におけるパラスポーツ体験など、学校教育と連携した事業展開

(2) 認知症予防・共生の全市拠点

「認知症神戸モデル（※9）」推進に向けて、今後ますます重要となる「予防と共生」実現の拠点として事業を推進 しあわせの村が地域生活をサポートする場に

- 幅広い世代が認知症を学び・集い症状を理解することで、生活への影響を緩和することを旨とする。さらには、楽しみながら予防事業に参加できる環境を整備
- 認知症患者の社会参加・就労支援、当事者や家族の集い、「神戸モデル」の発信、最新機器の体験コーナー、予防のための運動プログラム等



今後の課題

- ✓ 共生を地域に広げるため、「しごと」や役割づくりと連携して、若年性や早期の認知症患者がゆるやかに働ける環境づくりなどにも取り組む
- ✓ まだ病院での治療やショートステイでのケアは必要としない、症状がより軽度な方に向けて、生活習慣改善や専門的なアドバイスを受けられるプログラムを提供できないか検討
- ✓ 様々な研究機関や企業と連携し、効果を実証しながら事業を進める必要がある

(3) あらゆる子どもの成長支援

少子高齢化の中で、自然環境も活かした子どもの成長支援や、成長支援を通じた交流や人材育成などの地域づくりがますます重要に

- しあわせの村の自然フィールドを活用し、子どもの実体験を支援するプログラム開発
- 各地域と連携し、子ども自身がリーダーとして活躍する機会の提供
- 障がいの有無に関わらず楽しめる子どもの遊び場整備
- 家族間・世代間交流、社会経験機会の提供など、ステップを踏んだ事業のコーディネート



今後の課題

- ✓ 誰もが参加できる遊びや体験を作り出すため、バーチャル空間も取り入れた展開を検討
- ✓ 宿泊機能も活用しながら、地域の子どもの活動指導者と連携した取り組みの拡大
- ✓ 取り組みを広げるため、成長した子どもたちが、再びリーダーとしてしあわせの村や地域に関わる人材となるよう育成することを目指す

(4) 動物とのふれあいを通じた交流

村の立地や環境を活かし、動物とのふれあいを通じた交流を広げる

- ・ アニマルセラピー（※10）や動物とのふれあいによる、心と体の健康増進
- ・ 村を訪れる高齢者・障がい者や子どもたちなど様々な人々の交流を促す



（今後の課題）

- ✓ 動物とのふれあいを人々の交流につなぐため、ボランティア活用などの仕組みづくりを検討

③新たなまちづくりに向けた、しあわせの村でイノベーションを起こす基盤づくり

(1) 新たなユニバーサル社会構築の実験

利用者ニーズをとらえ、最先端の技術を導入することにより、新たな福祉サービス創出の基盤を村内に整備

- ・ 村内巡回バスのオンデマンド（呼び出し）システムの導入
- ・ 次世代先進移動手段の検討、ドローンやバーチャルリアリティ（仮想現実）の活用
- ・ 電動車イスによる、個々人の自動移動手段の実証 など
- ・ 障がい者、高齢者、スタートアップ企業等が参加し快適な生活や、しごとを得るためのアイデアコンテストの開催・村内施設と連携し、実証実験の実施 など



(2) 施設のリニューアル

様々な取り組みの実現を支えるため、施設を効果的に活用

- ・ 温泉健康センターをリニューアルし、様々な事業と連携
- ・ 施設の効果的な転活用
- ・ バリアフリー対応、ユニバーサルデザイン対応

今後の課題

- ✓ 将来にわたり“しごと”や役割づくり、技術の発信など、市内や全国に広がる取り組みを展開するためには、最新テクノロジーを積極的に導入し、先進地であり続けることが重要
- ✓ 様々な事業を展開する企業や団体と連携するため、最新の情報や動向を常に把握し、村へ巻き込むことが欠かせない
- ✓ 多くの人・団体等からの参加を呼び込むためには、しあわせの村へのアクセス・村内各施設のアクセスについても改善を図ることが望ましい

マネジメント・コーディネート機能の強化

- ✓ 幅広い取り組みの実現及び継続実施にあたっては、PDCAサイクルに基づき、計画・実行から検証までの各段階において、研究機関や民間事業者など多様な主体との連携が不可欠
- ✓ あわせて、しあわせの村のビジョン・取り組みの方向性等に基づき、これらの多様な主体を適切にマネジメントし、新たなプログラム等をコーディネートする役割が極めて重要となる
- ✓ マネジメント・コーディネート機能の強化と人材育成を図るとともに、専門家や民間事業者との積極的な連携体制の構築を目指す

ブランド力の向上

- ✓ さらには、全国の研究機関や民間企業等が、ここで実証や事業を行うモチベーションとなるブランド力が必要であり、また市民をはじめ全国の人々がしあわせの村発の新しい取り組みを自分たちもやってみたい、と思える環境づくりが求められる
- ✓ 具体的には、社会的な活動・取り組みを表彰するアワードの創設などにより、取り組みを可視化するとともにしあわせの村のブランド力を向上させることなどが考えられる
- ✓ 新たな取り組みの実現による魅力向上とともに、プロモーション強化についても検討する必要がある

4 しあわせの村への期待 ～ 委員の発言より ～

しあわせの村の将来像・取り組みの方向性に関する意見

- ・ しあわせの村に様々な役割が集約されて、村から市全体をインクルーシブにしていく取り組み・仕組みが必要。そして市全体だけでなく、全国、グローバルへ発信していくべき。
- ・ 開村当時の「ノーマライゼーション」から「ソーシャルインクルージョン」へと、社会の価値観の変化を踏まえ、ソーシャルインクルージョンの拠点として、新たなものを村から発信していく必要がある。
- ・ 障がいや認知症も含め、市民が個性を持った多文化を許容する社会であり、それが当たりまえの神戸市になってほしい。多文化であることが強みとなる環境づくりをしあわせの村から作り出せないか。
- ・ 海外との競争力のある都市を目指すために、村には大きなポテンシャルがある
- ・ 村のまちづくりの観点からみると、今は「居住人口」がいないが、関係人口やメンバーシップも含めて「村民」をどう想定していくかが重要。
- ・ 遊べる・働ける・暮らせるしあわせの村 + 住環境を1パッケージで考え、一つの都市機能として検討してもよいのでは。
- ・ 人類の叡智は不可能との闘いの歴史であり、不可能への挑戦がイノベーションを生み出してきた。不可能の中にこそ発展のカギが詰まっている。この村がその拠点になってもらいたい。
- ・ 近未来のまちを体感できる村になってほしい。「今」を前提にしない、大胆な技術が必要。そのためには行政だけでは難しいため、やりたい企業を引っ張ってこることが必要。

高齢者・障がい者が主役の村づくりに関する意見

- ・ しあわせの村はこれまで「非日常」の施設であったが、今後は、働く場の提供など、「日常」にも重点を。
- ・ 周辺居住施設等を活用し、大学、NPOや企業などが集まって、地域での活動の拠点となる住まいの機能とはたらく拠点をセットで整備してはどうか。地域に拠点を持つことで地元の人とも連携可能。
- ・ 地域機能の回復のため、村がどう貢献していくかが重要。村に来てもらうのではなく、どう発信していくか。
- ・ 様々な専門家や全国で活躍している人々も呼び込めるとよい。シェアオフィスや住環境での交流によりイノベーションが推進される。しあわせの村がそうした取組のメッカになるとよい。
- ・ 村周辺に住み続けていくためのインセンティブが必要ではないか。その一つとして「しごと」は分かりやすいインセンティブである。従来のオフィスで働くことが困難な障がい者や高齢者、さらには若年性認知症の方など、様々な人が働ける環境づくりをこの村で実験していくと、神戸市だけでなく全国的なモデルとなるのでは。
- ・ プロジェクトにかかわる人達を「関係人口」と捉え、村のイノベーションに関わってもらいたいイメージ。外国からの研究者や事業者が集うような村になると、国際都市神戸の名に相応しい取り組みになるのではないかと期待している。日本人の働き方や生活を変えてくれるような海外の研究者や技術者等が来てくれ、発信してくれるとよい。
- ・ 障がい者雇用で重要なことは、働きがいのある仕事に従事できる状態を目指すこと。そのためには、忙しく活発な職場で、仕事が多くあり、労働力として必要とされる現場で働くことが望ましい。そのような職場で仕事への意欲の高い人・障がいに理解のある人を同時に呼び込むことが大切。
- ・ 障がいのある子どもがいる家族が働く拠点（サテライトオフィス）としても良いのでは。
- ・ 引きこもりや障がいのある人も含めて、移動することが難しい方への対応として、リモートワークやバーチャルリアリティの活用も視野に入れるべき。距離への挑戦・克服。外出ができない重度障がい者等もリモートで参加できればよい。
- ・ リモートワークと現場をコーディネートする人が必要。現実と切り離さないというポリシーを持って、リモートワークやバーチャルリアリティの活用を考えるべき。

様々な領域における課題への対応に関する意見

パラスポーツの振興

- 2020オリンピック・パラリンピック後を見据え、持続可能なパラスポーツの支援に取り組み、パラスポーツ先進地としての役割を発信してはどうか。
- 次の学習指導要領から初めてパラスポーツについての記述が入る予定。教育でも重要となる項目のため、しあわせの村をパラスポーツのプラットフォームとして開放していく、という考え方が必要では。
- 村に来たらeスポーツが楽しめ、人や社会とつながれる拠点になるとよい。
- 30代女性の体力低下が課題となっている。子育て期でもあるので、子どもから離れて、自分の健康のためにスポーツができる仕組みが必要では。その間、村の高齢者が子どもをみてるサポートがあるとよい。

認知症予防・共生の全市拠点

- 認知症への対応には「予防と共生」が重要。村にはハードの受け皿が整っている。若年性認知症、早期の患者で、元の職場では難しいが、就労能力もあり、生活のために収入が必要な方への支援ができないか。
- 本人が納得しながら働けるための様々な準備の場となれば、ボランティア等も含めてゆるく活躍できる場を検討できないか。
- 予防の観点から、トータルに生活を支援する「コグニケア（※11）」の考え方が重要。

あらゆる子どもの成長支援

- 青少年が役割をもって関わってくれる仕組みができないか。地域の人との関わりが、「ここに住んでよかった」と思えるために重要。エリアを広げた仕掛けが重要。
- 学校教育だけでなく人や社会とかかわることで生きる力を育成していくというコンセプトが重要。
- 子どもの貧困問題も含め、「育ち」の問題は福祉分野でも重要度が増している。「実際の体験」が「育ち」に与える影響は大きく、村が自然との関わり、様々な人との社会的関わりになるとよい。
- 児童向けプログラムにもICTによる支援を取り入れ、幅広い世代の多様な子どもを対象に考えたい。

しあわせの村でイノベーションを起こす基盤づくりに関する意見

- 社会環境の変化に対応するためには、新しいテクノロジーの導入が欠かせない。しあわせの村がそのための社会実験の場だ、というコンセプトを持ち続けることが重要。
- 具体的には、自動運転などの移動支援、特に個々人の移動支援が重要であり、村は電動車椅子、自動運転の実証にふさわしい環境が整ってる。最先端の場になってほしい。
- 村をイノベーション拠点としていくためにも移動支援の強化は必須。
- 障がい者や高齢者の生活が楽になるための、特に移動支援に関するIT有効活用について、社会実装される前の実験的な取り組みについて、村で積極的に行うことができるとよい。
- 災害時や人命救助等、ドローンには大きな可能性があり、今後ドローン技術者の育成がますます必要になる。ドローンは身体の不自由な方も操縦ができる。村をそうした育成の場として活用していくべき。しあわせの村と最新技術の融合に期待したい。
- 例えば認知症に関しても、見守りや早期発見の新たな取り組みが注目されているが、個人情報等の制約があり難しい面もある。しあわせの村を実証の場として規制緩和の適用を受けていくことが必要ではないか。

用語解説

※1 ノーマライゼーション (P.1)	障がいのある人もない人も、高齢者も若者もすべての人々が、地域社会の中で普通に生活できる社会こそ望ましい社会であるとし、すべての人がともに生きる社会を目指そうとする考え方
※2 ユニバーサルデザイン (P.1)	「みんなにやさしいデザイン」のことで、年齢・性別・文化・身体状況など、人々が持つさまざまな個性や違いにかかわらず、最初から誰もが利用しやすく、暮らしやすい社会となるよう、まちや建物・もの・しくみ・サービスなどを提供していこうとする考え方
※3 ソーシャル インクルージョン (P.1)	高齢者や障がい者など支援を必要とする人も含めた市民の誰もが居場所と役割を持ち市民として包摂され、誰もが取り残されない社会を目指そうとする考え方。社会的包摂。
※4 イノベーション (P.2)	物事の新しい捉え方・新しい活用法、または、それらを創造する行為。新しい技術の発明だけでなく、新しいアイデアから社会的意義のある新たな価値を創造し、社会的に大きな変化をもたらすことを意味する。 それまでのモノ・仕組みなどに対して全く新しい技術や考え方を取り入れて新たな価値を生み出して社会的に大きな変化を起こすことを指す。
※5 リモートワーク (P.2)	ICT（情報通信技術）を利用し、自宅や外出先など会社以外の場所で仕事をするなど、時間や場所を有効に活用できる柔軟な働き方
※6 超短時間雇用 (P.2)	障がい者法定雇用率の算定対象となる週あたり20時間以上の就労にとらわれない、新たな障がい者の雇い方、働き方。心身のコンディション等から長時間の勤務が難しくても、短時間であれば働ける障がいのある方が多くいらっしゃることを踏まえ、神戸市においても平成29年度より取り組む
※7 ニュースポーツ (P.3)	どもから高齢者まで、「いつでも、どこでも、誰にでも」気楽に参加し、専門的技術や経験がなくても無理なく継続できできるように、これまでのスポーツをアレンジしたり、新しく考えたりしたもの
※8 eスポーツ (P.3)	子コンピューターゲーム（PCゲーム、家庭用ゲーム、スマートフォンゲームが含まれ、アミューズメント施設に設置された業務用ゲーム機を用いて行われる場合もある）を用いた競技
※9 認知症神戸モデル (P.3)	平成30年4月1日に施行された「認知症の人にやさしいまちづくり条例」に基づき、認知症になっても安心して暮らしていけるまちづくりをより推進するため、認知症診断助成制度と認知症事故救済制度を組み合わせる実施。これらの事業を、市民の皆様から広くご負担いただくことで行う全国初の取り組み
※10 アニマルセラピー (P.4)	動物を使った治療手法。動物と触れ合うことで、ストレスを軽減させたり、あるいは当人に自信を持たせたりといったことを通じて、精神的な健康を回復させることなどが研究されている
※11 コグニケア (P.6)	認知症予防が必要とされる60歳代、70歳代に、運動や認知機能トレーニングなど「多面的に予防にいいもの」(1)定期的な運動 2)認知機能検査・健康度評価 3)認知症予防に関する情報提供)をパッケージにした、認知症予防プログラム